

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 ~ 2010

課題番号：19520384

研究課題名 (和文) 方言形成における中央語再生現象の研究

研究課題名 (英文) Reformation of Historical Words in Dialect Formation

研究代表者

小林 隆 (KOBAYASHI Takashi)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00161993

研究代表者の専門分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言形成、日本語方言、日本語史、感動詞、方言地理学、比較方言学

1. 研究計画の概要

本研究の目的は、日本語の方言形成にあたって中心的な役割を果たしたと考えられる「中央語の再生」現象について検討し、この現象の特徴を明らかにするとともに、方言形成の一般原理としての理論的整備を行うことにある。具体的には、次の3つの課題に取り組む。

- (1) 中央語の再生現象における諸特徴の把握 (=第1段階の目標)
- (2) 方言形成の一般原理としての理論的整備 (=第2段階の目標)
- (3) 方法論の開拓、および研究資料の作成 (=目標達成のための基礎固め)

まず、(1)は具体的な方言データを分析し、その特徴を詳細に把握するもので、第1段階の目標として設定する。次に、(2)は(1)の結果に基づき、方言形成論としての一般化を試みるもので、第2段階の目標、すなわち、本研究における最終目標である。(3)の目標は、その位置づけは(1)(2)の目標を達成するための基礎的な作業であるが、それ自体が本研究のひとつの重要な成果として期待できる。

2. 研究の進捗状況

(1) 中央語の再生現象における諸特徴の把握

中央語の再生とはいかなる概念なのか、方言圏論と関係させながら検討し、その研究が方言学上どのような有効性をもつのか考察した。次に、再生を考える際の観点や具体例を整理し、この現象の諸特徴を概略把握するとともに、現段階で導き出せるこの現象の傾向性や仮説を提示した。特定領域研究(A)

「消滅する方言語彙の緊急調査研究」(2000~2002年度)によって収集した資料をもとに、全国方言分布地図を作製した。特に、意味の変容のメカニズムについて集中的に考察するための項目や、再生と社会的要因との関係を把握するための項目、さらに、感動詞、オノマトペ、挨拶表現に関する項目を取り上げた。また、地方における再生の内容や要因を詳しく把握するために、広島県において感動詞の記述的な調査を実施した。

(2) 方言形成の一般原理としての理論的整備

上記(1)で明らかにした知見に基づき、方言形成論としての再生現象の一般化を試みつつある。その際、従来唱えられてきた「方言圏論」「方言孤立変遷論」「多元的発生」などの諸説との関連を検討し、方言形成モデルのひとつとして「中央語再生モデル」を構築しつつある。また、特に、言語的発想法の方言形成について「社会と言語運用の関係モデル」も作成した。

(3) 方法論の開拓、および研究資料の作成

文献上の形式と方言上の形式の対応関係を見るために、『日本方言大辞典』をもとに「文献・方言対応基礎データ」を作成し完成させた。これによって、中央語の再生現象の概略を把握し、傾向性を導き出すことで、この現象の一般化を試みるのが可能になった。また、『日本語地図』『方言文法全国地図』補足資料の作成として、感動詞と言語行動の分野について、通信調査法による全国調査を実施した。その結果、全国1000地点のデータを得ることができ、整備の上、分析に役立っている。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

目標として設定した課題、すなわち、(1)中央語の再生現象における諸特徴の把握、(2)方言形成の一般原理としての理論的整備、(3)方法論の開拓・研究資料の作成、という3つの柱は、いずれも順調に研究が進みつつある。新たに視野に入れた「社会と言語運用の関係モデル」も併せて、「中央語再生モデル」の構築は実現可能であるとの見通しを得ている。

4. 今後の研究の推進方策

当初設定した計画に従って最終年度の研究を遂行する予定である。言語的発想法の方言形成については、研究の途上で新たに着想を得たテーマであり、これを適切に「中央語再生モデル」に関連付けることが必要である。この研究の成果の一部は、研究書『方言の発見』(ひつじ書房)として公表の予定である。来年度以降は、方言形成という中心軸は維持しつつ、この言語的発想法の地域差の成立について、社会的・歴史的背景との関わりで研究を展開する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

1. 小林隆・澤村美幸、「言語的発想法の地域差と歴史」、『国語学研究』、査読有、49号、2010年、1-14頁
2. 小林隆・澤村美幸、「言語的発想法の地域差と社会的背景」、『東北大学文学研究科研究年報』、査読無、59号、2010年、127-162頁
3. 小林隆、「談話表現の歴史」、『日本語表現学を学ぶ人のために』、査読無、2009年、188-211頁
4. 小林隆、「東北南部地域における方言の概要」、『日本語方言地域概要報告』、査読無、2009年、21-37頁
5. 小林隆、「文法的発想の地域差と日本語史」、『日本語学』、査読無、26-11巻、2007年、76-83頁

[学会発表] (計3件)

1. 小林隆・澤村美幸、「消えゆく日本語方言の記録調査—『日本言語地図』との関連で—」、大規模方言データの多角的分析研究会、2010年3月15日 国立国語研究所
2. 小林隆・澤村美幸、「日本の文化領域と言語的発想法の方言形成」、言語・文化の領域形成に関する研究会、2010年2月22日メルパルク京都

3. 小林隆・澤村美幸、「方言分布と文化的背景—「焼畑」の名称を例に一」、日本語学会、2009年5月31日 武庫川女子大学

[図書] (計2件)

1. 小林隆編、岩波書店、『シリーズ方言学1 方言の形成』、2008年、222頁
2. 小林隆・篠崎晃一編、ひつじ書房、『ガイドブック方言研究』、2007年、212頁